

新たな意味や価値をつくりだすことができる生徒の育成 ～主題を追求し実現させる授業を通して～

I はじめに

学習指導要領解説では、「美術科の特質に応じた物事を捉える視点や考え方として、表現及び鑑賞の活動を通して、よさや美しさなどの価値や心情などを感じ取る力である感性や想像力を働かせ、対象や事象を造形的な視点で捉え、自分としての意味や価値をつくりだすことが考えられる」¹⁾と述べられている。自分としての意味や価値をつくりだしていくためには、表現において「上手」か「下手」かといった価値観で制作するのではなく、生徒が自ら強く表したいことを心の中に思い描き、生徒自らが生み出した主題^{注1)}を追求して実現することが大切であるとする。

教育の未来を描く、OECD Education2030 プロジェクトのラーニング・コンパスにおいて、2030年の未来に求められる「変革をもたらすコンピテンシー」の一つとして「新たな価値を創造する力」が位置付けられている。また、鈴木敦子は「創造性の育成は、美術の目標であり、創造的な表現活動に取り組む美術の学習は、今後のコンピテンシー育成に大きな役割を果たすことが期待される。」²⁾と述べている。これらのことから、これからの時代に起こるであろう諸問題の解決には、既存の知識や常識の枠組みに捉われない、新たな意味や価値をつくりだしていくことが求められており、その中で美術の役割は重要であるとする。

本校美術科では、主題を追求し実現する過程において、他者と協働しながら感性や想像力を働かせ、造形的な見方・考え方^{注2)}を働かせて表現したいものを考えたり、作品から表現のよさを発見したりするなど、新たな意味や価値をつくりだす活動を繰り返す必要があるとする。新たな意味や価値をつくりだす力をより高めることができるようになれば、作品を見て作品の意味や価値をつくりだして感動したり、自然や身の回りにあるもののよさや美しさに気付いたりしやすくなり、豊かな情操を養うことができ、人生をより豊かにできると考える。

前研究シリーズでは「主題を追求し実現することができる生徒の育成」を研究主題として実践を行ってきた。成果として、表現するための基礎的な知識・技能を習得させるとともに、発想し構想を練り、作品を制作していく過程において、常に主題を意識させ、振り返らせながら表現をさせていくことが、主題を追求し実現することにつながったと考える。しかし、主題を追求し実現させていく際に、主題がより深まっていったり、制作途中に表現方法が変容していったりする思考のプロセスを明らかにできるような手立てが不足していたことから、最終的になぜその主題になったのかや、なぜそのような表現方法になったのかという過程を、生徒が自覚しにくかったという課題が残った。そこで、「見通し、行動、振り返り」という「AARサイクル」^{注3)}を基にした考え方で、「工夫ポイント」^{注4)}を学ばせ活用の仕方を見いださせることで、アイデアスケッチや制作の際に見通しをもたせ、さらに主題をより具体化し、主題を深めさせていく。また、こまめに自分の制作について振り返ったりさせることで、学びの文脈に沿って主体性を発揮しながら活動に取り組ませることができるようになると思う。

また、主題を追求し実現する過程で、「工夫ポイント」の活用の仕方を考える場面や、自分の表したいことを効果的に表現する活動、自他の作品を振り返る活動を繰り返すことで、さらに新たな意味や価値をつくりだす力を高めることにつながると考える。そこで、本校美術科における深い学びを、「造形的な見方・考え方を働かせ、主題を表現することを通して新たな意味や価値をつくりだす力を身につけるこ

と」とする。

以上のことから、本研究シリーズでは研究主題を「新たな意味や価値をつくりだすことができる生徒～主題を追求し実現させる授業を通して～」と設定した。

Ⅱ 研究の概要

1 美術科が目指す生徒像

本校美術科では、次のような生徒を育てたいと考える。

主題を追求し実現することで、新たな意味や価値をつくりだすことができる生徒

「主題を追求し実現する」とは、生み出した主題を基に、発想し構想を練り、表現方法を創意工夫し、創造的に表していくことである。主題を追求し実現するためには、表現するための基礎的な知識・技能を習得させるとともに、発想し構想を練り、作品を制作していく過程において、常に主題を意識させ、他者と協働させながら表現を振り返らせ、表現をさせていく必要がある。

「新たな意味や価値をつくりだす」とは、主題を追求し実現する過程において、感性や想像力を働かせ、対象や事象に対して、造形的な見方・考え方を働かせて表現したいものを考えたり、作品から表現のよさを発見したりするなど、自分としての意味や価値を見いだしたり、価値づけをしたりすることができることである。その際、他者と協働することで、一人で考えるときには思いつかない視点や考えを得ることができ、新たな意味や価値を見いだすことにもつながると考える。

2 育みたい資質・能力

美術科で目指す生徒を育てるためには、次の資質・能力を育む必要があると考える。

- 主題を基に、発想し構想を練る力
- 主題を基に、創造的に表す力

「主題を基に、発想し構想を練る力」とは、生み出した主題を基に、基礎的な知識・技能を活用して、自己の表したいことを考えたり、目的や機能を踏まえたりしながら多くのアイデアを豊かに発想し、表したいものの構想を練る力のことである。また、「主題を基に、創造的に表す力」とは、材料や用具などを生かし、表現方法を振り返りながら見通しをもって自分の生み出した主題を表していく力のことである。

3 資質・能力を育むための手立て

個に応じた指導の充実を図り、知識・技能を段階的に習得させ、資質・能力を育んでいくために、題材の流れの中に「つかむ場」「追求する場」「ふりかえる場」という三つの場を設定し、それぞれの場ごとに手立てを設定した。

(1) 「つかむ場」

「つかむ場」は、生徒に本題材がどのようなものなのかをつかませ、「工夫ポイント」を提示し（後掲1）、学ばせ、主題を生み出させる場である。まず、本題材のねらいや条件を伝えたり、必要に応じて参考作品を鑑賞させたりすることで、どのような題材かを把握させる。次に、「工夫ポイント」を学ばせるために、「工夫ポイント」が意識できる参考作品を鑑賞させ、「工夫ポイント」の活用の仕方に気付かせて「工夫ポイント」を確認させる。そしてその効果について友達と意見交

換させたり、「工夫ポイント」を意識して簡単な表現をさせたりする。「工夫ポイント」の効果についての知識を得ることで、アイデアを発想する際の手がかりになり、作品制作への見通しがもてるため、主体性を発揮して制作に取り組むことができるようになることを考える。そして、自らが感じ取ったことや考えたこと、作品制作のねらいや条件などを基に、題材について思い浮かべたことの中から自分が何を表したいのかをワークシート（後掲2）に書き出し、整理していくことで、主題を生み出せるようにする。最後に主題をワークシートに記述させる。

(2) 「追求する場」

「追求する場」は、生み出した主題を基に発想し構想を練るアイデアスケッチや試作と、材料や用具などをいかして作品を制作する本制作を行わせていく場である。生み出した主題を基に、「工夫ポイント」を活用しながらアイデアを発想させ、アイデアスケッチや試作をさせる。次に、自分だけでは思いつかないアイデアを得るために協働的な学びとして中間鑑賞会を行わせる。アイデアスケッチや試作を基に、主題が「工夫ポイント」を活用して表現されているかなどを意見交換させ、ワークシートや付箋紙に記述する活動を行わせる。ワークシートや付箋紙に書かれた記述から、「工夫ポイント」の新たな活用の仕方に気付かせ、参考になりそうなアイデアを見付けていく。次の構想を練る場面では、中間鑑賞会での友達の意見や気付いたことを、どのように取り入れるかを取捨選択するように促した上で、アイデアスケッチや試作を見直させていくことで、より主題が表れる作品の構想を練ることができるようにさせていく。また、「工夫ポイント」を活用しているか確認させながら発想し構想を練らせていくために、アイデアスケッチや試作に、主題を表すために「工夫ポイント」をどのように活用しているかをワークシートに記述させ、それを振り返らせながら表現の見通しをもたせていく。

そして、本制作では、主題を表すために材料や用具などを生かし、表現を振り返りながら見通しをもって作品を制作させていく。その際、教師が題材で扱う材料や用具を題材に合わせたものにすることで、生徒の表現の幅がより広がりやすく、主題の表し方を追求しやすいようにする。また、制作の途中で深まった主題や、毎時間の表現方法をワークシートに記述させたり、写真として作品の経過を記録させたりする。その際、個々の生徒の実態や表したいものに応じて材料や用具などを選択する幅をもたせ、学びの個別最適化を図る。そうすることで、制作とともに深まっていく主題や、表現方法の変容を自覚させながら、見通しをもたせていく。本制作時には、毎時間の授業の最初や終わりに制作の記録（後掲3）を使い、短時間の制作の計画や振り返りの時間を設ける。自分の制作の進み具合を把握し、どうすれば「工夫ポイント」を活用して主題を表すことができるようになるのかを分析し、互いの作品の鑑賞や、意見交換をできるようにさせる。そうすることで、主題を表すための「工夫ポイント」の活用の仕方や、材料や用具などの生かし方などを見付けさせ、それを基に表現方法を振り返らせながら見通しをもって表現させていく。

(3) 「ふりかえる場」

「ふりかえる場」は、主題を表すために「工夫ポイント」を活用していくことがどのように効果的だったかを考えさせたり、生み出した主題を表すことができたかを振り返らせたりし、自分の制作過程での成果を自覚させる場である。本制作をして完成した自他の作品を鑑賞させる最終鑑賞会を行い、友達の作品を、主題を表すために「工夫ポイント」をどう活用しているかを意識して鑑賞することで、主題を表すための多様な表現方法に気付かせる。そうすることで、作品に込められた思いや、作品のよさや美しさに気付きやすくなるようにする。「工夫ポイント」を活用していくことがどのように効果的だった

たかをワークシートに記述させることで、学んだ知識・技能が他のどのような場面で生かせそうかを考えることにつなげていく。

4 資質・能力が育まれたかの評価について

「主題を基に、発想し構想を練る力」については、主題を基に「工夫ポイント」を活用して豊かに発想し構想を練ることができたかをワークシート（後掲4）から評価し、「主題を基に、創造的に表す力」については、主題を表現するために、「工夫ポイント」を活用して、表現方法を振り返りながら見通しをもって表すことができたかをワークシートや作品から評価することで、手立ての有効性を検証する。

5 研究の経緯

1年次では育みたい資質・能力である「主題を基に、発想し構想を練る力」「主題を基に、創造的に表す力」を育むために「つかむ場」「追求する場」「ふりかえる場」という三つの場を設定し、それぞれの場で一貫して「工夫ポイント」を提示し、意識させた。「つかむ場」では「工夫ポイント」を生徒に提示し、それを基に鑑賞させることで「工夫ポイント」の活用の仕方を見付けることができていた。

「追求する場」では「工夫ポイント」を基にアイデアを発想させたり、意見交換をし、主題を基に「工夫ポイント」をより効果的に活用できるように考えてアイデアスケッチを修正したり、制作したりする生徒の姿が見られた。また、「写真やワークシートでの制作過程の振り返り」で制作の記録で毎時間の目標を立て、振り返りを行った。写真も追加することで、一目で制作の過程を振り返ることができるようになり、「工夫ポイント」を見直しながら学びの文脈に沿って自分の表現方法を追求する姿が見られた。このことから主題を表現するために、「工夫ポイント」を活用して、表現方法を振り返りながら見通しをもって表すことができたと言える。「ふりかえる場」では「工夫ポイント」を意識して作品を鑑賞することで主題を表すための多様な表現方法に気付くことができていた。

しかし、「工夫ポイント」を十分に活用できず、深い学びに到達できていなかった生徒も見られた。それは「工夫ポイント」に関すること以外にも工夫できることが多くある題材であったことや題材の設定が不十分であったためであると考えた。また、主題から離れてしまう生徒も見られた。それは、制作の記録に書かせることが多く、十分に振り返ることができていなかったことや「工夫ポイント」の表現のみを意識し、主題とのつながりが十分でなくなってしまうためであると考えた。

2年次では、「工夫ポイント」を精選し、題材とより関連しているものに変えた。また、「工夫ポイント」をより意識して主題を表すために「工夫ポイント」の活用の仕方を考える際に手掛かりとして追求させたい造形の要素を「分析するポイント」として提示した。そして制作の記録の形式を改良して効率的に主題を表現できているかを振り返ることができるようにした。

「工夫ポイント」の精選と題材との関連性を見直したことで生徒が工夫ポイントを活用しやすくなり、主題を表すことができていた。また、「分析するポイント」を提示したことで生徒が「工夫ポイント」の活用の仕方についての考えを深めることができた。そして制作の記録の形式を変え、より効率的に振り返りを行うことができるようにしたことで、制作に掛ける時間と、毎時間の振り返りの時間のバランスがとれるようになり、自分の制作の見通しをもって制作に取り組み、生徒が主題の表し方を追求できることにつながった。

しかし、知識・技能の習得が不十分になっていた生徒も見られた。それは「分析するポイント」を提示したタイミングが遅く項目も多かったため「工夫ポイント」と「分析するポイント」の関連性を理解できず混同し、十分に考えを深めることができなかったことが原因であると考えた。

6 最終年次のねらい

最終年次は引き続き「工夫ポイント」を一貫して提示することに加えて「分析するポイント」の造形の要素を「工夫ポイント」に追加し「工夫ポイント」をより具体的なものにし、「つかむ場」から生徒に提示することで知識・技能を十分に習得させ、生徒がより主題の表現を追求できるようにするとともに、上記の手立てを踏まえた年間指導計画の作成を行い、美術科の目指す生徒像に近付くことができるようにしていく。

Ⅲ おわりに

本研究では題材の流れの中に「つかむ場」「追求する場」「ふりかえる場」という三つの場を設定した。それぞれの場で一貫して「工夫ポイント」を生徒に提示し、そこからアイデアを発想させたり、意見交換をさせたりすることや、毎時間の授業の最初や終わりに短時間の制作の計画や振り返りの時間を設け、自分の制作の進み具合を把握することを手立てとして、主題を追求し実現することで、新たな意味や価値をつくりだすことができる生徒の育成を目指して実践に取り組んできた。

最終年次では引き続き「工夫ポイント」を一貫して提示することに加え、中間鑑賞会での意見交換交流や写真やワークシートでの制作過程の振り返りは継続しつつ、「分析するポイント」の造形の要素を「工夫ポイント」に追加し「工夫ポイント」をより具体的なものにし、「つかむ場」から生徒に提示する手立てを通して美術科が目指す資質・能力を育むことができたかを検証した。その結果、ワークシートや作品、アンケートから生徒が「つかむ場」から「工夫ポイント」を意識して作品を鑑賞することで「工夫ポイント」の活用の仕方についての理解を深め、それを基に主題の表現を追求する姿が見られた。また、追求する場では意見交換をしたり、目標と振り返りの時間を設けることで「工夫ポイント」をより効果的に活用できるアイデアを発想したり、見通しをもって制作したりすることにつながったと言える。また、制作の記録に主題の深まりや表現方法の変容を記録できるようになり、前研究シリーズの課題だった最終的になぜその主題になったのかや、なぜそのような表現方法になったのかという過程を、生徒が自覚しにくかったことを解決することができた。ふりかえる場でも「工夫ポイント」を意識して作品を鑑賞させたことで主題を表すための多様な表現方法に気付くことができ、作品のよさや美しさに気付くことができていた。

これらのことから育みたい資質・能力を培うことができ、目指す生徒像に迫ることができたと言える。

注 1) 主題とは、作品を通して生徒が強く表したいことである。

注 2) 造形的な見方・考え方とは、想像力を働かせ、対象や事象を造形的な視点で捉え、自分としての意味や価値をつくりだすことだが、本校美術科では、各題材で手がかりにしたい造形的な視点を「工夫ポイント」として設定し、生徒に示す。

注 3) AAR サイクルについて白井俊は、「AAR サイクルとは、“Anticipation-Action-Reflection”の頭文字をとったものである。それらを日本語に直訳すると、「見通し、行動、振り返り」ということになる。」「教師による「見通し」や「振り返り」の実践が否定されるものではないが、より重要なのは、その結果として、生徒が自ら「見通し」や「振り返り」を行っていくことができるようになるのか（すなわち AAR サイクルをまわすことができるようになるのか）、という点だろう。」と述べており、このプロセスで学ぶことは、生徒に求められているコンピテンシーを育んでいくのに必要な学習プロセスとされている。

注 4) 「工夫ポイント」とは、主題を表す上で題材に応じて意識させたい基礎的な知識・技能として教師が設定する造形的な視点である。

引用文献

- 1) 文部科学省『中学校学習指導要領解説 美術編』日本文教出版、2017 年、10 ページ
- 2) 鈴木淳子『美術科教育の理論と指導法』日本文教出版、2021 年、2 ページ

参考文献

- 鈴木淳子『美術科教育の理論と指導法』日本文教出版、2021 年
- 白井俊『OECD Education2030 プロジェクトが描く教育の未来』ミネルヴァ書房、2020 年
- 奈須正裕『個別最適な学びと協働的な学び』東洋館出版社、2021 年
- 大橋功『美術教育概論（新訂版）』日本文教出版、2018 年
- 奥村高明『マナビズム』東洋館出版、2018 年

後掲 1

「good なデザインのスプーンを考えよう」①

月 日

1 年 組 番・氏名「

デザインについて考えよう

1 グッドデザイン賞を受賞しているスプーンの good ポイントを見付けよう。（個人）



- ・持ち手、すくう部分などそれぞれどんな形をしているか？・使う対象は？・使う場面は？
- ・使いやすくなる工夫は？材料によるよさは？・装飾性はある？

2 見付けたよさを交流しよう（グループ）

メモ

工夫ポイント…

「

」

「

」

」

3 今日のまとめ 罎

自分の考える「good なデザインとは何か」考えよう。

※ 自分の考えが伝わるように具体的、かつ明確に書こう

※ どこからそう考えたか、根拠を入れて書こう。

※ 1 つだけでなく複数の観点から考えよう。

「good なデザインのスプーンを考えよう」③

主題を生み出そう 月 日

1 good なデザインのスプーンを どんな人に、どんなときに、どのように、何のために 使って欲しいかを考えよう。

手順 ①思いついたものを箇条書きでたくさん書いてみよう

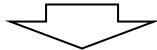
②書いた中からより、つくりたいと思うものを1つ選ぼう（決めたものを赤丸で囲もう）

どんな人に

どんなとき

どのように、何のために 何を感じてもらいたい？

- ☐
- ・おじいちゃん、おばあちゃん・赤ちゃん・手の不自由な人・だれでも・親子
 - ・〇〇を食べるとき・〇〇のとき（イベント）
 - ・〇〇のように使うことで〇〇を味わえる。・食べるときに〇〇しやすくする。



2 1で考えた内容を基に主題（デザインのコンセプト）を考えよう
コンセプト…作品の全体を統括するテーマや表現の下地になる考え方。

- ☐
- ・〇〇のストレスを解消する・素材の魅力をいかして・〇〇のときに楽しく使える
 - ・〇〇な人のために・〇〇好きな人に刺さる

8 中間鑑賞でもらった意見を基にアイデアの最終版を考えよう。学
※どんな意見をもらって、それについてどう考えてどうしていこうと思ったかを具体的に詳しく書こう。

月 日 1年 組 番・氏名「 _____ 」

3 アイデアをかこう 図 ※色々なパターンを考えてみよう
※工夫ポイント「形」の中の「使用感」「見た目」を意識しよう

図と言葉でかこう

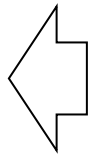
4 試作をつくってみよう
※何を試すか、何を確かめたいか、何を練習したいかを意識してつくろう

5 試作で試したこと、確かめたこと、練習したこと

6 試作をして分かったこと、修正したところ、修正したいところ

中間鑑賞会 月 日

7 友達からもらった意見、アドバイスをメモしておこう

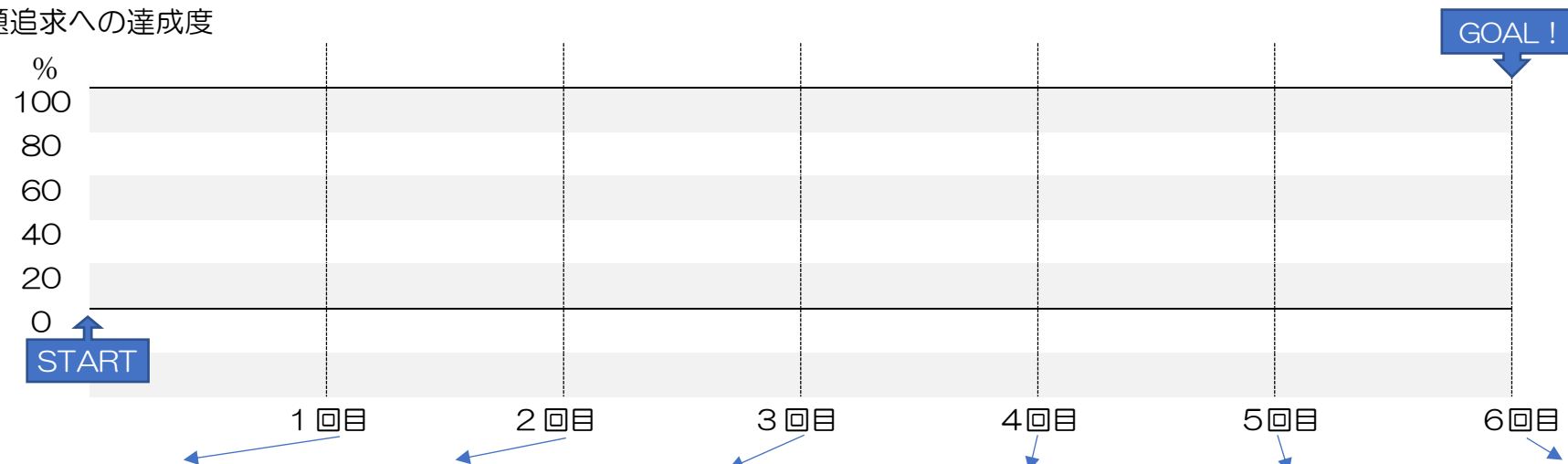


後掲3

制作の記録

主題（自分が一番強く表したいこと）

主題追求への達成度



日付						
目標						
振り返りと次時に向けて						
写真						

計画と振り返り 学

「good なデザインのスプーンを考えよう」④

月 日

1 年 組 番・氏名「 _____ 」

最終鑑賞会

1 自分の作品について振り返ろう。

○主題を表すために「使用感」「見た目」をどのように活用できましたか 知

※具体的に主題の何を表すために工夫ポイントをどのように活用したかを書きましょう。

「使用感」
「見た目」

2 友達の作品のよさを見付けよう

※具体的に主題を表すために工夫ポイントをどのように活用しているか、それによってどんな効果があるかを書きましょう。

※複数の項目で見付けましょう。

作者	工夫ポイントの活用とその効果
さん	
さん	